

Public Interest Incorporated Foundation for Shiretoko Institute of Wildlife Management

設立財団ニュースレター

Vol. 2

2014年3月25日発行

ワイルドライフマネジメントプレフォーラム in 東京

野生生物の「反乱」を食い止める

を開催しました

公益財団法人知床自然大学院大学設立財団は、2014年3月8日（土）、東京都港区の聖アンデレ教会で、ワイルドライフマネジメントプレフォーラム「野生生物の『反乱』を食い止める」を開催しました。

シカやイノシシ、サルなど、全国的に野生動物と人間社会との軋轢が問題となっている昨今の現状について、その道の専門家の方々に講師に招き、報告やトークセッションを行っていただきました。

当日は賛助会員の方々や一般参加者合わせて約90人の方にご参加いただきました。終了後には、同教会ホールで参加者と講師陣の懇親会を開き、知床産シカ焼き肉の試食も行いました。今後もワイルドライフマネジメント（野生生物保護管理）の必要性、それを担う人材育成の重要性を広く伝える活動に力を注いでいきたいと思えます。

プログラム（講師敬称略）

第1部 報告と問題提起

「シカが増えすぎている!？」

東京農工大教授 梶光一

「クマやイノシシが都会にやってくる!？」

兵庫県立大准教授 横山真弓

第2部 トークセッション

野生生物の反乱を食い止めるためには？

梶光一（前出）、横山真弓（前出）、

横山隆一（日本自然保護協会常勤理事）

渡辺綱男（国連大学シニアプログラムコーディネーター、元環境省自然環境局長）

中川元（当財団業務執行理事、元知床博物館長）

司会：鈴木幸夫（当財団理事）

講演概要は2～4ページで紹介しています！





梶 光一さん

北海道環境科学研究センターを経て東京農工大学教授。日本哺乳類学会理事長。我が国のシカ研究の第一人者。



横山 真弓さん

兵庫県立大学准教授。ツキノワグマやニホンジカ、イノシシなど、人と軋轢のある野生生物の行動研究を行っている。

■ シカが増えすぎている!?

江戸時代のシカの分布状況と、1978年と2003年の環境省のニホンジカ分布調査があります。シカは江戸時代以前の生息地に分布を拡大しており、環境省調査でも、25年間で分布域は1.7倍に拡大しています。シカが全国的にかつての空白地域に広がっていますが、植生に非常に強い影響を与えています。ひどいところでは林床、林の下の草も全部シカに食い尽くされて、土が流れてしまっている。こうなると、土壌浸食が起こってきて、もう元に戻らない。農林業被害も深刻ですが、国土保全とか生物多様性の問題まで拡大してきていると思います。

狩猟者の数は70年代には50万人いましたが、現在20万人を下回っています。一方シカの捕獲数は2010年時点で20万を超え、現時点では30万頭を超えています。狩猟者は急激に減り、シカは急激に増えている。減るばかりでなく、高齢化が進んでいます。狩猟者は60歳以上が60%を占めています。私たちはこれまでに全く経験していない時代を迎えています。

知床岬のシカは70年代までに一回絶滅し、その後急激に増加します。私は86年から調査を始めましたが、小さい木の樹皮食いから始まり、その後枯れ木が増え、みるみる植生が変わっていく様を観察しました。それらを踏まえ、知床では世界自然遺産になったときにシカに関する管理計画を作りました。世界遺産ですから、基本方針は、できるだけ人為的な介入を避けることです。でも希少植物などを放置したら絶滅する恐れがある場合、捕獲を含めた対策を行いましょうということです。

私たちの目標は、数を減らすことにあるのではなく、どんな状態に持っていくかということ。シカが増えれば、植物の豊かさ、花の開花率、最後は群落に影響を与える。これを減らしていったときに何が起るかというモデルは、世界でも全くない。それを今開発していこうというのが、私たちのミッションです。

■ クマやイノシシが都会にやってくる!?

まず、人家近くまでやってきている野生動物のビデオからご紹介します。神戸の市街地では20年以上前からイノシシが出没しています。新神戸駅近くのマンション前でイノシシがごみを漁ったり、コンビニの袋を持っている人を襲うと、買ったものがストンと落ちるという学習をしてしまったのです。郡部の方ではツキノワグマ。人家の庭にある柿の木に親子グマがいます。自分の場所だと言わんばかりに。私たちがカメラを向け、大きな声を出しても何ともない。これは本当に野生動物の姿でしょうか。

神戸では餌付け問題があります。通報件数の多い場所を集計すると餌付け地域から150m以内の範囲で被害が発生しています。近くの六甲山は豊かな森で、イノシシが暮らすのに何の問題もないのです。ところが里に出てくるのは山に餌がないからだとか都会の人は思い込んでいる。つまりは食べ物のあるところに出没します。クマも実は同じ。人は気にとめていなくても、実はクマを誘引していたという事例があります。

秋にクマが出没した場所で、捕まえたクマにGPSを装着して調べると、柿の実に繰り返し来ていることがわかりました。その集落では、柿の実を数えてみると248本ありました。ざっと計算すると集落に大体6トンくらいの実があることになります。こんな豊かな餌資源を、クマが見逃すはずはありません。「柿の木切ってください」と言っても田舎は高齢化が著しく労力がなく、簡単ではありません。

動物はどんどん増え、どんどん学習しています。それにどう対応するかは、我々がいかに対応する能力をつけていくかだと思います。対策者を増やしていかなければなりません。何が起っているかを調べて対策を立案し、それを実施して検証して見直しをしていく。このサイクルを行うのが非常に重要です。

トークセッション



左から 梶 光一
横山 真弓
渡辺 綱男
(国連大学シニアプログラムコーディネーター、
元環境省自然環境局長)
横山 隆一
(日本自然保護協会常勤理事)
中川 元
(当財団業務執行理事、元知床博物館長)
司会：鈴木 幸夫(当財団理事)

■ ヒグマと人を追い払う知床

司会 先ほどから軋轢と対策の状況についてお聞きしてきました。他にもいろいろ軋轢を起こしている野生動物がありますので、補足の説明をまずお願いします。

横山(真) シカ、クマ、イノシシ、それにニホンザル。これが鳥獣保護法と呼ばれる法律の中で、都道府県が特定計画というのを策定している、主に問題となっている種だと思います。外来生物としては、ほ乳類はアライグマ、ヌートリアなどがあります。

司会 中川さんから知床、斜里町での野生生物との共存の方策、現場についてお話をお願いします。

中川 知床は原生の自然、豊富な野生動物、素晴らしい生態系があるのはよく報道されて、皆さんも耳にされていると思いますが、そこでいろいろな問題が起きていることは、全国的には報道されていないかと思います。幸いシカについてはさまざま方策が講じられ、植生が回復の方向に向かってきていますが、他にも課題があります。

知床はヒグマの生息地です。そして年間200万人近い観光客が来ます。しかもヒグマが人を恐れなくなってきたて久しいです。10数年前から、人を恐れない、頓着しないヒグマが現れています。知床は大規模な鳥獣保護区になって30年以上。そんな中でヒグマも捕獲されないという経験を積んできたということもありますが、一般の観光客もクマを恐れなくなってきた。

ヒグマが普通に道路ぶちにいたり、秋に川でサケマスを獲得姿が車道脇で見られたりします。そうすると人が次々と集まり、車から降りて写真を撮る、近づく。大変危険な行為です。^{*}知床財団の職員はヒグマが出没するとまず追い払いをしますが、一方で人も追い払わなければならない。なかなか言うことを聞いてくれない人もいます。

^{*}知床財団～1988年に斜里町が出資して設立した公益財団法人。現在は羅臼町も設立者となり、環境教育や野生生物の保護管理・調査研究、森づくりなどの活動を行っている。

それからとんでもないことですが、ヒグマに餌を投げ与える行為も確認されています。

司会 「日本の野生生物保護の法制度の概要」という資料を配布しました。渡辺さんの方から少しご説明いただければと思います。

渡辺 今、鳥獣保護法の改正作業が進んでいます。特定計画で目標を設定し、個体数を減らすことも進められていますが、それを狩猟や被害対策の有害駆除だけに委ねるのではなく、国や都道府県が自ら生態系のことも意識し、個体数をバランスのとれた状態にしていくための事業を、計画をたてて進めていく。それを法律的にも位置づけようというもの。兵庫や北海道の先駆的な取り組みを、全国に広めていくことを、制度的にも後押しすることをめざした改正が検討されています。

■ 対策は地域ごとのオーダーメイド

司会 制度的な改革、改正の観点以外から、軋轢をどう止めていくか。横山隆一さんから聞かせてもらえれば。

横山(隆) 軋轢を解決する手順や技術は、全世界共通なものでしょうが、一体何をするかという具体的な内容は、地域ごとに全部オーダーメイドなのですね。ですから、手順や技術の教科書はたくさん作られていると思いますが、手順とその地域での解決方法という内容の両方を普遍的な情報として書き込んだ教科書は多分作れないのだと思います。どうやって地域ごとの内容をきちんとオーダーメイドで作っていくか。それがとても大事ななと思います。

現代の私たちは、身近な自然環境を全く利用しなくても生活できてしまうという社会に生きています。それをそのままにした中で、この軋轢を解決できるのかどうかということが、非常に心配です。周囲の自然を全く資源

として使わない初の日本人、初の経験をしているこの時代に、地域の自然をどうしていくか。それがこの軋轢や問題をどう解決していく大きなキーワードではないかと思います。

司会 地域資源の利用という言葉が出てきましたので、その辺りを梶さんから。

梶 資源を利用しないという話がありましたが、わかりやすくいうと、野生動物を食べることがあると思います。日本は宗教的に食べなかったという方もいますが、たくさんの種類の動物を伝統的にずっと食べてきたが、食べる文化を忘れてしまった。ですから都会に住む皆さんが一番できるのはおいしく食べるということで、すごく重要なことです。

野生動物管理は動物と被害の問題ではなくて、中山間地域、山村など、そこの地域の持続性の問題だと思います。今大きな問題は、狩猟者だけでなく、地域資源管理者、これは森林を管理する人、それから林業、農業も、そういう方々が急速にいなくなっていることです。地域資源の管理者は、要するに地域の持続性を考えて、そういうことをマネージできる人、そういう専門家が必要。やはり地域資源を持続的に管理していく仕組みづくりが一番重要なことと思っています。

■ 重要なのは人材育成、教育

司会 今回議題のワイルドライフマネジメントとは何か。それを今後どういうふうに展開していくかということを一言ずつお願いします。

横山(隆) やらなければならないのは地域の環境管理であり、地域の社会状況マネジメントだと思います。

高等教育を受けた人に、地方や地域に目を向けてもらうにはどうしたらよいか。大学で学び、こういう環境について研究する能力を持つ人たちが、地域で住むためにはどうしたらよいか。それは大変肝心な話で、人生設計をつくれる生業があればいいのです。大学もそこまで仕事をするべきだと思います。ところが今はガイドをしないとか、一次産業どうだとか、今ある生業を半端に突きつけているように感じる。地域の環境を維持する中核になれる人たちに人生設計できる新たな生業と一緒に作っていくのが、今40、50歳の人たちの責務ではないかと。40、50代の人たちが、まだ世の中に認めてもらっていない仕事を職業に仕立て上げていくには、それよりも高

齢の方々が、その生活や仕事を今、現実を支えなければならぬ。そうやって回していけない限り、軋轢も解決できないのではないかと思います。

渡辺 知床ではさまざまな機関が縦割りの壁を超えて、協働の関係が生まれました。大きく見て環境行政と農林行政、あるいは森林行政、そういったところがちゃんと連携していけるか。また国、都道府県、市町村。それぞれが動いて、連携関係をどうつくっていくか。

そして行政だけではなく、狩猟者、農業者、あるいは地域住民など、いろいろな立場の人たちが、どう一緒になって動けるか。きっとそれをつなぐ大事な役割として、専門家が果たしていく役割は大きいものがあると思います。そのための人材をどう増やしていくかというのが重要な課題だと思います。

横山(真) 私、兵庫県に行って丸13年になるのですが、最初全く野生動物の科学的情報がありませんでした。一から情報を集めなければという状況でした。

まず必要なのは科学的な情報収集と分析、それと発信ですね。その情報を国民と共有をして、じゃあどうするべきかという議論をしていく。細かいところは地域によって全然違ってくると思います。同じデータを見ても違うかもしれません。日本の今の野生動物の現場では、あまりにも情報収集の仕組みがなさすぎる。そういう意味で知床は莫大なデータがあると思いますので、スタートラインとしてはすごく高い位置にあるのかなと思います。これをどう分析をして、みんなで共有できる形にしていけるのか。それらが重要だと思います。

梶 重要なのは法的な整備、そのために現場の問題をどう解決するかということ、下からあげていくことですね。私たちが現場に行ってやればいいのですが、圧倒的に時間が足りなくて、これでもかとどんどん問題が出てくる。次に大変なのが市町村です。市町村の担当者に強力なサポートが必要です。専門性やコーディネート力があり、都道府県の計画と市町村の計画をつなぐ人たちも必要です。単に野生動物を何頭獲ったかということではなく、地域の持続性のためにどういう力を発揮できるのか。やっぱり一番重要なのは、教育でしょう。教育が世界を変える。今私たちが直面していることと同じことがアジアで起こってきて、その後にはヨーロッパでも起こってくるのです。日本の状況を今世界が注目しています。

★このプレフォーラムは、講師の皆さんのほか、たくさんの方のご協力をいただき開催することができました。9ページ下段に謝辞を掲載しております。

知床からの出発

顧問 渡辺 綱男

(一般財団法人自然環境研究センター上級研究員／国際連合大学サステナビリティ高等研究所シニア・プログラム・コーディネーター／元環境省自然環境局長)

2005 年 7 月、南アフリカのダーバンで開催された第 29 回世界遺産委員会で知床は日本の 3 番目の世界自然遺産として登録されました。

その前年に登録の審査のために IUCN(国際自然保護連合) 保護地域プログラム部長のデビッド・シェパード氏が知床を訪れました。当時環境省の東北道地区自然保護事務所長だったわたしはシェパード氏の現地調査の案内や説明を担当しました。現地調査の際にシェパード氏の心を動かしたものがあります。

ひとつは「しれとこ 100 平方メートル運動」です。全国で大規模な開発が進められていた 1970 年代に地域の自治体が主導して、全国の多くの人々の支援によって開拓跡地の保全・再生の取り組みが始められたことにシェパード氏はとても強い印象を持ちました。もうひとつは、知床財団の活動です。知床財団の研究者の皆さんからエゾシカやヒグマの調査・モニタリングや保全管理の取り組みについてシェパード氏に解説してもらいました。その解説を聞いてシェパード氏は地域の自治体が設立した財団の研究者が世界的にも先進的な研究や保全管理活動を担っていることを高く評価しました。これらのことが、世界遺産登録の審査にあたったシェパード氏の背中を強く押したようにわたしは感じました。

知床が世界自然遺産として登録された際に、「豊かな海域生態系の保全と持続的な漁業の営みの両立」、「サケ科魚類の河川への遡上を回復するためのダムなど河川工作物の改良」、「エゾシカ管理のための指標の確立」などの課題に取り組むよう勧告されました。その課題解決に大きな力を発揮したのが、地域連絡会議と共に設置された科学委員会のメンバーです。この科学委員会にはこれまで長年にわたって知床での研究活動に携わってきた研究者の皆さんに参加していただきました。そして科学委員会メンバーの皆さんは、「科学的な見解は自分たちが責任を持つ」、そして「提案したことは、その実現のために自分たちも現場に何度も足を運んで共に汗を流す」という、

とても真剣な姿勢で関わっていただきました。そのことがさまざまな行政機関や地域の組織間の強い協働の関係を生み出し、難しい課題への対応を可能にしていたように思います。

登録からおおよそ 2 年後に登録時の勧告に基づく取り組みの進捗を評価するためにシェパード氏とユネスコ自然遺産担当部長(現・世界遺産センター長)のキショー・ラオ氏が知床を訪れました。両氏の評価報告のなかで、知床への勧告事項に関して 2 年の間に大きな進捗が得られたこと、特に地域連絡会議を通じたボトムアップのアプローチと科学委員会を通じた科学的なアプローチを上手く組み合わせて難しい課題に対応したことは、世界各地の遺産地域にとって参考となる貴重なモデルと高く評価されました。

知床には、世界でここにしかない貴重な自然があります。豊かで時に厳しい自然に包まれ、最も間近なところで自然と向き合いながら、その自然を大切に守り続けてきた地域の皆さんの熱意があります。そして世界的にも先駆的な野生生物管理や生態系管理の取り組みを支えてきた多くの研究者がいます。知床での先駆けとなる取り組みが、全国、そして世界での新しい流れを創り出していく、知床から社会を変えていく、知床はそうした可能性を持っています。

わたしは、世界遺産登録の前年、ちょうどシェパード氏の現地調査が行われている際に、地元の皆さんから「知床自然大学構想」のことを伺いました。その時、容易に越えられるハードルではないけれど、こうした目標を持って具体的に活動していくことこそ大きな意味を持つと感じました。この知床のフィールドとそこに関わる多くの研究者のネットワークを活かした知床自然大学院大学が設立され、全国の大学等の研究教育機関とも連携して、野生生物や生態系の管理(マネジメント)を現場で担える専門性を持った若い人材を数多く育てていくことが出来そうですように強く期待します。

辻井達一先生の思い出

理事 齋藤 卓也

北海道内、日本国内のみならず、世界の貴重な自然環境の保全に尽力された公益財団法人北海道環境財団前理事長、辻井達一さんが亡くなり1年。辻井さんの仕事を長年そばで見てきた齋藤卓也理事より、辻井さんとの貴重な思い出について寄せていただきました。

辻井先生が、昨年1月15日、本当に惜しまれながら亡くなってから早いもので1年が過ぎました。湿原研究に数多くのご功績を残されましたが、他にも北海道遺産協議会、平取イオル再生、北海道ラムサールネットワーク、イザベラ・バードの道を辿る会、道内各地のフットパス、北海道沈没地図作成、等々枚挙にいとまがありません。先生はアイデアマンで好奇心旺盛、何にでも、顔を突っ込んでくるんです。中でも、先生の一番の関心事はやはり「食」でした。一年に一度は必ず鮎料理を食べに、余市の水明閣を訪れました。お正月には、お雑煮の出汁を取るために、滝川からあい鴨の肉を取り寄せるほどでした。そんな先生が一度も口にしていなかった肉が、タンチョウです。「徳川將軍家の献上品の中にタンチョウがあった。絶対に美味しいに違いない。何とかならないか」と話を持ちかけたのが、タンチョウ研究第一人者の正富宏之さんでした。正富先生は、目を剥いて「何を言い出すんだ。特別天然記念物をどうして手に入れられると思う」。辻井先生は尚も食い下がって、「事故死したのとか何とかならないのかな」。残念ながら最期まで辻井先生がタンチョウを口にすることはありませんでした。

釧路湿原、霧多布湿原、別寒辺牛湿原、道東は湿地の宝庫ですから、先生はよく道東方面に行かれました。そして定宿にしていたのが、霧多布のペンション「ポーチ」でした。ここで「生牡蠣」を食べるのを楽しみにしていました。バケツ一杯の牡蠣をあっという間に平らげ、持ち込んだスコットランド・アイラ島のシングルモルトウイスキーを飲みながら、辻井節が夜更けまでつづくのでした。

先生の大好きなアイラ島のウイスキーは、独特の風味があります。北海道環境財団に入って間もない頃、先生に誘われて、ススキノにある「エルミタージュ」というカクテルバーに行ったことがあります。先生は「シングルモルトウイスキーを飲もう」というので、私も同じ物をと注文しました。ここで先生は、私の飲む様子をじーっと伺っていたのです。その味とったら、正露丸そのものの味、臭いなのです。とても飲めたものではありませんでした。その様子を見て先生の喜びようといったら…。不思議なもので、このクレオソートの味がくせになるのです。私も今では、時々アイラ島のウイスキーを買って飲んでいます。このバーには先生のオリジナルカクテル「サンゴ草」があります。ベースは忘れましたが、真っ赤な如何にも先生らしい色合いのカクテルでした。

先生は、ご自宅でもチビリチビリとウイスキーを楽しんでいたようです。ご自宅は円山動物園の裏手にあり、いろいろな動物、昆虫が家の中に迷い込んできました。エゾモモンガを捕まえて、飼っていたこともあるそうです。ある日、カメムシが窓の隙間から迷い込んできました。書斎でウイスキーを飲んでいた先生は、カメムシに、ウイスキーを数滴与えました。このカメムシが呑兵衛だったらしく、数滴飲み干すとまた所望するのです。また数滴、これも飲み干す。そうするうちに、カメムシ足下がふらつき、酔っぱらって、千鳥足になり、片手を挙げて、「もうご勘弁を…」と言った仕草をしたというのです。この「ご勘弁を…」という仕草をカメムシに成り代わって演じる姿が先生らしく、忘れられません。

東京生まれ、神田育ちの先生は、チャキチャキの江戸っ子で、お酒が入るとべらんめい調になります。趣味も多彩、新し物好きで、まだ誰も飛行機に乗っていない頃から、ダグラス DC3、DC4、パイカントなどに乗った経験を話してくれました。車も大好きで、若いころからフォルクスワーゲンビートルを乗り回していたそうです。愛すべき辻井達一先生、思い出話は尽きません。

INTERVIEW

当財団設立者 上野 洋司（知床斜里町観光協会会長）

知床観光に長く携わってきた設立者の一人、上野洋司さんに大学院大学設立への思いを伺いました。

■上野さんが自然大学構想を思い描き始めたのはどのようなきっかけがあったのでしょうか？

しれとこ 100 平方メートル運動が本格化し、ナショナルトラスト運動の気運が高まっていた頃、漠然と知床に自然大学があってもいいのではないかと思い始めました。斜里町として構想があったということは知らなかった頃ですね。世界自然遺産登録の準備をしていた 2003 年ごろには、環境省の方と自然を学ぶ教育機関があればいいな、という話をしたこともあります。

90 年代に入ってから、地元ではシカ問題などが出てきて、こんなに増えたらどうしようもない、森の劣化が著しいということで声をあげていましたが、なかなか対策が進まない。そういう状況を見ていたら、人間はこんなに身近なシカのことさえわかっていない、と強く感じました。当時はヒグマについても、知床には専門家がいても実態はわかっていないことが多いということでした。

シカやクマに関わらず、生態系全体にアプローチしていないのではないかとという疑問もわいてきました。そこでやはり、自然全体にアプローチするシステムや機関が必要だと思いました。自然大学院大学構想は、現場での現実的な要請だと思います。

■上野さんは知床で生まれ育ち、現在は知床第一ホテル会長、知床斜里町観光協会会長を務められています。自然大学と地元観光との関係についてはどう思いますか？

知床斜里町観光協会は今エコツーリズムを大きなテーマとして事業を展開しております。エコツーリズムにおいて中心的な役割を担うのは自然ガイドであります、このガイドの活動や育成に自然大学は大きな役割を果たすようになると考えております。また、大学設立によって交流人口が増えるということはとても大事なことでと思います。

今は少しでも多くの観光事業者に、この大学構想を理解してもらいたいと願っています。知床の自然を守っていくのは観光事業者にとっても大事なことであり、また、世界自然遺産に登録された歴史的経緯からみても自然保護というテーマは、斜里町が掲げていくことを求められていると思います。地元には「自然保護は知床財団や知床博物館がやっていることだ」と考えている人が多いかもしれないが、自分のこととして考えていかなければならない段階になってきていると思います。

■上野さんが今後、知床自然大学院大学に期待することは何ですか？

先ほど話した現場の現実的な要請、ワイルドライフマネジメントの人材育成というのはもちろんなのですが、私はこの大学の成功によって、社会の価値観の転換を発信できるのではないかと考えています。

今、世界中で宗教戦争ともいえるべき紛争が起こっていますが、それは結局、経済の代替戦争だと思うのです。自然大学の成果が、自然と人間の「共存の思想」を育み、今までの経済活動優先の流れを断ち切って、社会意識を変革していくきっかけになればいいなと。勿論、途上国の経済問題は大きな課題として内在しています。

この大学構想はいろいろなテーマを含んでいる新しく大きな挑戦であると思っています。この時代にタイミングがぴったり合っている。具体的な大学の形は専門委員会の先生方が議論してくださっています。設立に向けて課題は多く、設立後も多くの課題を背負っています。それらに関係者皆で一つ一つクリアして夢の実現を図っていければいいと思っています。



活動報告

公益財団法人への認定、第1回計画策定専門委員会開催について、報告いたします

公益認定までの道のりと今後

理事 鈴木 幸夫

公益法人制度改革により、主務官庁による許認可・指導制から、届出により誰でも法人設立が可能になった。その中で「民による公益活動」を担う目的の一般財団・一般社団は、公益認定申請を行い、「認定基準」を満たすものは公益認定され、税制優遇措置等により民間ベースの「公益活動」を活性化できる。「公益」に拘らない一般法人は、株式会社と同様収益事業に精を出しても、サークル活動の運営母体としてもよい。

当財団は、自然保護の新しい価値創造、その根幹たる人づくりとその実現の舞台となる大学院大学を知床の地に作るために発足し、公益認定を受けることを前提にしていた。準備さえ遺漏なく行えば、申請作業はスムーズに行くはずであった。が、現実はそう甘くはなかった。

運営を担う理事は全員無給のボランティア。本業の合間を縫って作業しなければならない。事務局は北海道東端の斜里町、申請先は東京都港区神谷町の内閣府公益認定等委員会事務局。千数百キロの距離を埋めるため、首都圏在住の家村、鈴木を中心に行った。但し、必要な証明書類は地元でしか手に入らないものも多く、事務局にも大きな負担を掛けた。

申請に先立ち、同委員会事務局の相談コーナーを8月1日と9月10日に2度利用した。そこで疑問点や不安な部分を尋ねる。特に重要だったのは「大学設立資金そのものを集めることが果たして公益事業か?」と、「大学設立資金をどう扱うか」だった。

結論から言うと、定款については「そのままで構わない」との意見。しかし、他にも修正の必要があり、定款の「事業」も併せて修正することに。「資金」は「6号財産として扱うのがよい」との回答を受け、会計処理方法も明確になった。

次が電子申請である。申請は内閣府のホームページ上

のフォームに必要事項を入力し、登記簿謄本や事業計画書などの資料を添付する。印刷すると1cm以上の厚みになる書類だ。これらを整え申請ボタンを押し提出する。そして担当官が決まり実質的な審査が始まる。この作業に時間を要した。準備書面を自己検証し、予測貸借対照表をはじめとした書類を作成する。済んだのは10月12日。

しかし実はここから山坂が始まる。自己嫌悪に陥るほどの単純ミスから数字の整合性、表現や語句の修正など、事務局からの指摘は多岐にわたった。担当官のMさんは懇切丁寧に指摘・指導くださり、的確なアドバイスをいただいた。求められた付属資料やその修正を担当理事間でメール・電話でやり取りし、それをMさんにメール送信、時に電話や面談時間を取っていただきながらの修正作業の日々が続く。作業時間は帰宅後深夜や早朝、休日。時にパソコンを会社に持ち込んで休み時間にも作業した。平行して法人の機関決定も。「定款」「役員等報酬規程」の変更の評議員会決議は「決議の省略」で12月4日に起案、同9日付で決議。大学院大学設立までのロードマップは代表理事、業務執行理事、事務局長、担当理事間で協議し、資料として添付した。

事務局によるチェックとやり取りを繰り返しながら申請書の完成度を高め、公益認定等委員会の常勤委員3名が参加しての事務局内会議に上程されたのが1月7日。そして委員会(7名)開催は1月17日。認定答申が内閣総理大臣に対して出され、1月24日付で答申書が公表された。そして1月30日に内閣総理大臣名での公益認定書を受理した。

今後は、公益法人の名に恥じぬよう実行力を高め、目標に向け着実に前進していかなければならない。その前提として法を順守した適切な財団運営が求められる。定期提出書類、内閣府の検査などにも、しっかりと対応していかなければならない。そして、「知床自然大学院大学を作ろう」という同じ夢をもった皆様からの貴重な寄附金・賛助会費によって成り立っている、ということを肝に銘じ、公益事業を推進していきたいと思う。

＜寄附金控除について＞



当財団は、内閣総理大臣による公益認定(公益社団法人及び公益財団法人の認定に関する法律第4条に基づく)を受け、平成26年1月30日に公益財団法人になりました。当財団への賛助会費及び寄附金は、所得税法施行令第217条第1項第3号及び法人税法施行令第77条第1項第3号に該当する特定公益増進法人として、寄附金控除の対象となります。なお、公益認定を受けた当財団の概要等は下記の通りです。

法人の名称 公益財団法人知床自然大学院大学設立財団
 代表者の氏名 田中俊次
 主たる事務所の所在地 北海道斜里郡斜里町青葉町28番地10
 公益目的事業 知床自然大学院大学の必要性を広く世に訴え、設立・設置を準備する事業

＜個人の方＞

■ 所得税

他の公益法人との合計で、年間2,000円を超える寄附金額が、所得控除の対象となります。控除を受けるには当財団が発行する領収書を添えて確定申告する必要があります。詳しくは国税庁のホームページ、またはお近くの税務署または税務相談室へお問い合わせください。

■ 相続税

遺言による当財団への遺贈、ならびに相続された財産から申告期限内に入金された寄附金には、相続税がかかりません。遺贈に関する詳しい条件は弁護士や信託銀行へ、相続財産の寄附に関しては当法人までご相談下さい。

＜法人の方＞

■ 法人税

法人の通常有する寄附金の損金算入限度額と併せて、別枠で算出した特定公益増進法人に対する寄附金の損金算入限度額を損金に算入できます。詳しくは、お近くの税務署や税理士にご相談下さい。

※2014年1月30日以降にいただいた賛助会費及び寄附金が、寄附金控除の対象となります。

※確定申告、税務申告時に領収書が必要ですので、申告まで大切に保管しておいてください。

ワイルドライフマネジメントプレフォーラムについての謝辞

4 ページ続き

3月8日に東京で開催したワイルドライフマネジメントプレフォーラムは、主催者協力団体として公益財団法人日本自然保護協会、野学校の多大なるご協力をいただきました。チラシ配布や情報メール発信などについては公益財団法人日本野鳥の会、公益社団法人日本環境教育フォーラム、公益財団法人東京都公園協会みどりの図書館、丸の内さえずり館、エコギャラリー新宿、港区立エコプラザ、エコタウンしながわ、めぐろエコプラザ、銀座美経の各位にご協力をいただきました。

会場に設置したポスターバナーは株式会社ビーコーポレーション様から、会場の写真は有限会社スタジオ・ビー・ツー様から、それぞれ無償でご提供いただきました。聖アンデレ教会にはフォーラム会場・懇親会場を、長時間にわたり快くご提供いただきました。

またボランティアで運営をサポートしてくださった方々、有難うございました。このように多くの皆様のご協力で今回のフォーラムは盛会で意義あるものとすることができましたことを深く感謝申し上げます。

第1回知床自然大学院大学計画策定専門委員会について

2014年1月24日（金）、札幌市の北海道立道民活動センター（かでの2・7）で、初の計画策定専門委員会を開催しました。

専門委員会とは、知床自然大学院大学の大学像や計画策定に関する検討を行うことを任務とする委員会です。野生生物管理の現場で研究や教育に活躍されている、下記の皆さんに委員として参画いただき、昨年12月に発足しました。

初顔合わせとなったこの日は、10人が出席。知床で大学院大学設立を目指す意義や必要性、育てる人材、独自性と連携などについて、活発な議論を繰り広げていただきました。現在の日本の野生生物管理、大学教育などの問題点を踏まえ、目指すべき大学像がより明確になったのではないかと感じています。

初回の議論をベースに、今後、詳細な計画策定に向け、カリキュラムや教員、規模など具体的な内容に踏み込んだ議論を行っていきます。



知床自然大学院大学計画策定専門委員会（2013年12月発足）

委員長	梶 光一	当財団理事・東京農工大学大学院共生科学技術研究院教授
副委員長	中村太士	北海道大学大学院農学研究院教授
委員	小林万里	東京農業大学生物産業学部准教授
委員	桜井泰憲	北海道大学大学院水産科学研究院教授
委員	鈴木正嗣	岐阜大学応用生物科学部教授
委員	敷田麻実	北海道大学観光学高等教育センター教授
委員	中川 元	当財団業務執行理事・元知床博物館館長
委員	松田裕之	横浜国立大学大学院環境情報研究院教授
委員	横山真弓	兵庫県立大学自然環境科学研究所准教授
委員	吉田剛司	酪農学園大学環境共生学類教授
委員	吉田正人	筑波大学大学院人間総合科学研究科教授
オブザーバー	大泰司紀之	当財団顧問・北海道大学名誉教授
オブザーバー	渡辺綱男	当財団顧問・元環境省自然環境局長
オブザーバー	田中俊次	当財団代表理事・東京農業大学生物産業学部教授

知床コラム

地元斜里町、羅臼町在住の役員が、知床の今や自然環境について綴ります。

早春の知床

業務執行理事 中川 元

真っ白に海を埋め尽くしていた流氷原が、低気圧の通過による南風で沖へ押し戻され、開いた海面に小さな流氷が一面に浮いています。今年の知床は例年にない積雪でした。山も畑も街もまだ深い雪に埋もれています。ただ、3月に入ると例年のように快晴の日が続き、日差しも日一日と強くなって、連山も平野も流氷も、まぶしいばかりに白く輝いています。

流氷がゆるむと、海面に浮いた氷の上に羽を休めるオジロワシやオオワシが増えてきます。オオワシはこれからオホーツク海沿岸を北に移動しながら、繁殖地のサハリンやアムール川流域に向かいます。また、1年を知床で過ごすオジロワシは既に繁殖シーズンに入っています。3月下旬には、大木の上に作った大きな巣の中に産卵、親鳥は沖の流氷を見ながら卵を暖めます。雛が孵化するのは、流氷が消えてカモメやウミウが渡ってくる5月初めです。

流氷の上で産卵し、子育てをするのがゴマフアザラシやクラカケアザラシです。早春に生まれたばかりの子は全身真っ白な産毛で覆われています。これは流氷の上の保護色。アザラシの子はオオワシの餌になるのです。氷があげた海にはシャチが姿を見えますが、泳ぎ始めたばかりのアザラシの幼獣はシャチにねられることもあるでしょう。静かに見える早春の海では動物たちの生きるための営みが展開されています。

雪解けの早い海岸の斜面には、草を求めてたくさんのエゾシカが出てきます。雪の多い今年ですが、例年4月に入ると一気に雪は溶け、土が顔を出します。するとヒバリやムクドリ、ハクセキレイが真っ先に姿を見えます。そして北の繁殖地に向かうヒシクイやオオハクチョウの群れが頭の上を通過し、氷の融けた川にはオシドリが羽を休めます。ヒグマが冬眠から目覚めるのもこの頃です。畑では融雪剤を撒くスノーモービルが走り、海岸の漁業番屋では今年の漁の準備が始まります。

これまでも、そしてこれからも続くであろう、早春の知床の姿です。野生の生きもの達と、ここで暮らす人、ここを訪れる人達とが良い関係を保ち、共に永く自然の恵みを享受しながら生きてゆく。そのためには人間の側が常に考え、状況を把握し、必要な手だてを施して行く体制が必要です。自然と人との共存、その中核になって活躍する人材が全国各地で求められています。

チョコレートの向こうに未来が見える

事務局長理事 金澤 裕司

もう、バレンタインデーとは全く無縁になってしまったが、いや、正直に言えばそもそも縁がなかったのだが、チョコレートについて考えた。

教育の世界には、いろいろな「流儀」がある。また、流行もある。「〇〇メソッド」とか「□□方式」「××主義」などとよばれている。「老舗」もあれば「新興」もある。中には現れて、いつの間にか消えていくものもある。

僕が初めて「ESD」に出会った時、ESDもそんな「流儀」や「流行」の一つなのだろうと思った。

ESDとは「Education for Sustainable Development」の頭文字で、「持続可能な発展のための教育」などと訳される。(最近、文科省では「持続可能な開発」という訳に統一したが、この訳はこの概念が提案された時の趣旨とは違うように思う。)

環境、貧困、人権、平和など世界が直面する課題を子どもたちが自らの問題として捉え、それらの解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動である。

ESD は取り組むべき課題と手法が一体となり子どもの意識を変え、持続可能な社会づくりの担い手を育むための教育だ。1992 年、国連環境開発会議（リオデジャネイロ）において環境問題解決に向けて取り組むためには教育の力の重要性が指摘されたことを受け、2005 年日本の提案によって「国連 ESD の 10 年国際実施計画」をユネスコで策定し、国連総会にて承認された。今年はその最終年にあたる。（文部科学省 HP を参照）

2011 年、羅臼町の全ての学校がユネスコスクールになって ESD について知れば知るほどそれは「流儀」や「流行」とは全く違うことがわかってきた。ただ、現場の先生方の理解を得なければ児童生徒には浸透しない。ところが現場の先生がたの多くは、僕の第一印象と同様に「ESD は一つの流派にすぎない」と受け止めているようなのだ。

どうやったら「偏見」を打ち破り ESD の真実を伝えられるか、ずっと考えていた。

先日、ふと思いついた。ESD の「繋がる教育」という側面を伝えてはどうだろう。

「環境の諸問題」とか「持続可能な発展」、「そもそも持続可能性とは」などと論じても具体的なイメージは湧かない。先生たちに直感的にわかってもらうためには、「つながる教育」と呼ぶ方が良いと思ったのだ。

例えば、バレンタインデーのチョコレートを題材にしてみる。

チョコレートの原料はカカオだ。カカオ豆の原産地は熱帯アメリカでコロンブスのアメリカ発見によってヨーロッパにもたらされた。カカオは、アオイ科の植物の種子で熱帯地方で育つが、雨の多い湿潤な気候でありながら水はけの良い乾いた土地を好む植物なので栽培可能な土地に限られる。植民地時代には、プランテーション作物として栽培されていたが、今でも栽培に従事している人々の暮らしは貧しい。また、カカオ栽培の畑を開くために熱帯の自然植生が大幅に破壊された。ここまでの情報の中にも、生物、世界史、地理、歴史、経済などに関連した事項が含まれる。

もし、「チョコレート」をテーマに学校全体が取り組んだならば、理科と社会科は言うに及ばず、現地の情報収集を英語科で、統計の数的処理は数学科で、チョコレートを使ったお菓子作りを家庭科で、それらをまとめて発表する指導は国語科や英語科が担当できる。「総合的な学習」でチョコレート関係の仕事をしている人に講演してもらうとか、工場見学などが出来れば最高だ。これによって、子どもたちの頭の中には、「チョコレート」がリアルに立体的に構築されるのではないだろうか。この体験は記憶の深部に刻まれ、生きた学習になる。学ぶ喜びや学ぶ意義についても理解できる。

現在、子どもからしばしば発せられる「何のために勉強しなければならないか」という問いへの明瞭な答にもなる。結果的に学力も向上することになる。それが ESD なのである。

学習を深めれば、子どもたちは、カカオを生産している発展途上国の人々が不当に安い賃金で働いていること、そんな国の人々が不公平な貿易によって貧しい境遇に置き去りにされ、過酷な労働に従事していることなどに気づくだろう。それがわかれば、チョコレートの価格をどのくらいにするのが正当な取引かを知ることができるだろう。ESD の特徴の一つである「批判的思考」によってものを考えることができるわけだ。

学校現場では、教科ごとの独立性が強く、教科間で連携して単元配列を決めるということはまずあり得ない。異なる教科の教師間で相互に授業内容を交流することさえあまりない。

仲が悪いということではないが、教科のことについては、背中を向け合っているような実態がある。だが、授業を受ける生徒は同じ生徒なのだ。

無用な垣根は取り払い、教師同士が力を合わせて生徒を伸ばすのが ESD である。

そして、その連携は学校内だけではない。幼小中高という校種を越え、地域や国境さえ越えて広がることができる。

思考を空間的にも時間的にも拡張できるのが ESD なのである。

ESD の理念や目的を教員が意識することも重要だが、現場では、その実践の具体像を強く求めているのではないだろうか。

理事会報告

2013 年度第 2 回理事会

日時：平成 25 年 11 月 17 日（日） 13:00～16:00

場所：道の駅しゃり コミュニティホール

出席者は理事 8 名、評議員 3 名。

今後の計画策定の中心を担う「知床自然大学院大学計画策定専門委員」の選任を承認したほか、2013 年度上半期の事業進捗状況を確認。その他、公益財団法人認定申請の経過報告（当時）が行われ、大学院大学設立までの今後の行程などについて、フリートーキングで活発な議論がなされました。

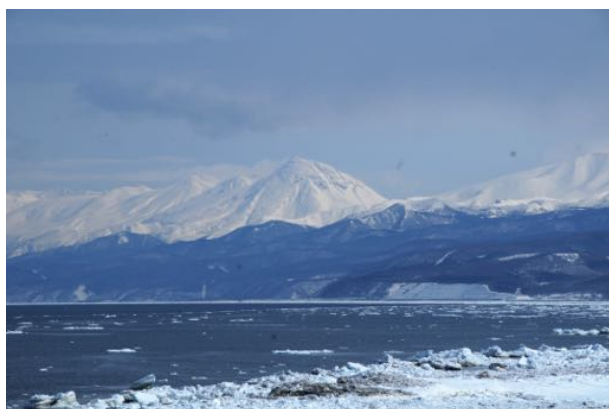


***** 流氷写真館 *****

今シーズンもオホーツク海に流氷がやってきました。

2014 年 1 月 21 日に網走で流氷初日、2 月 9 日に流氷接岸初日が観測されました。

本州では桜の便りが聞こえる 3 月下旬になっても、知床の海では小さな流氷がぷかぷか漂う様子が見られました。（中川業務執行理事撮影）



知床自然大学院大学設立財団は

活動を支援してくださる 賛助会員、寄附金 を募集しています

■賛助会員とは

この財団の目的に賛同する個人・団体・法人が会費を通じて支援するものです。

■会員の年会費

個人会員：5,000 円

団体会員：10,000 円

法人会員：20,000 円

法人特別会員：100,000 円

※年度ごとの納入となります。

■加入申し込み方法

パンフレット折り込みの「払込取扱票」を使用ください。

パンフレット刷り込みの「申込書」を使用ください。

その他、事務局まで電話、FAX、メールでお問い合わせいただければ、必要な手続きをお伝えします。

電話 0152-26-7770 FAX0152-26-7773

E-mail sizendaigaku@wine.plala.or.jp

■賛助会員の特典

当財団のニュースレターはもちろん、年次報告書、講演会やセミナーの案内情報を優先的にお送りします。

■寄附金について

寄附金も随時募集しています。

賛助会員加入同様にお申し込みください。

※寄附金控除については 9 ページに詳しく解説しています。

■主な入金口座について

ゆうちょ銀行 記号 19940 (普) 10138691

(※他の金融機関から 店名九九八 番号 1013869)

北洋銀行斜里支店 店番 452 (普) 3119440

北海道銀行斜里支店 店番 904 (普) 0530326

網走信金斜里支店 店番 003 (普) 0284957

大地みらい信金羅臼支店 店番 003 (普) 1072873



編集後記

昨年秋の第1号発行後、財団の活動としては計画策定専門委員会の発足や、公益財団法人の認定・移行などの事業を進めることができました。知床は今冬も激しい暴風雪に見舞われ、道路閉鎖などで陸の孤島となる日々もありました。ただ、そんな冬の厳しさを乗り越えた分、春を迎える喜びは本当に大きいものです。皆様のところにも素敵な春が訪れますように。

事務局・竹川

設立財団ニュースレター 第2号

発行 公益財団法人知床自然大学院大学設立財団

〒099-4117 北海道斜里郡斜里町青葉町 28-10

TEL 0152-26-7770 FAX 0152-26-7773

Web <http://www.shiretoko-u.jp>

E-mail sizendaigaku@wine.plala.or.jp

発行日 2014年3月25日

本誌掲載記事・写真などの無断転載をお断りします。